

氏名	荒殿 優花
ヨミガナ	アラトノ ユウカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第509号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 出現の光景：「場所」と「空間」をめぐる私の神話的往還 〈作品〉 ①精霊 ②葉と光 ③邂逅（場所と空間）

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	北郷 悟
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原 真一

（論文内容の要旨）

美術とは、物質的なものと精神的なものを統合することにより成される創造的活動である。

第一章では、美術作品を成立させる物質と精神の両面について考察し、「生成」や「出現」の現象について述べる。それらに立ち会うことが私の作品制作の最も根源的な動機であると思えるからである。「生成」は、物質が変容することにより別のものがつくり出されることを意味し、「出現」は、それまで無かったものが突然に現れることを意味する。

地球上の物質に関して、私たちは、すでに存在する何かの変容して別の何かになる「生成」についてのみ語るができる。地球上に存在し、人間が五感によって触れることのできる「もの」は、宇宙を構成する物質が形を変えながら循環する過程のなかのひとつの相を示しているのであり、何かの消滅は別の何かの生成を意味するからだ。

一方、人間を含む動物の生命や、意識や心といった精神的なものには、この「消滅＝生成」の規則が当てはまらない。それらが消滅するときには、他の何かに変容するのではなく、ほんとうに消滅する。生命や意識や心は物質の集合から「発現」することで存在を開始する。私は、それらが宇宙のなかにかげがえのない一度きりの存在として現れるという事実を重要視する立場から、それらの「発現」を特に「出現」という言葉で表現したいと考える。

そして、物質的な次元と精神的な次元の結合した美術作品の世界にも「出現」ということがあり得る。精神的な次元がそれを可能にするからである。作品が制作されるという出来事を物質的に見れば、それは何らかの物質が手を加えられて様態を変えられたことに過ぎないが、それと同時に精神的な次元において、それまでに存在しなかったなにかの「出現」が起こっている。かたちやイメージや感覚などが「出現」してくるのである。

私自身の、作品の制作を通して新しい精神的価値を「出現」させようとする試みは、独自の神話的イメージを構築することにつながっている。それは宇宙に星座を描くことに似ている。星の配置を動物の姿などに見立てた星座は、人間の想像力の投影である。人間は、遠い星の光に動物や神話の登場人物などのイメージを重ね、測り知れない宇宙空間をいわば人間化することによって、ある種の心の力を得てきたのではないだろうか。宇宙はさまざまなものごとの関係性において成立しており、私は制作を通して、それぞれのものごとのありかたと、それらの関係性を探ろうとしてきた。作品が増えていくとともに、私の「宇宙の地図」が絶えず更新されてきたということができる。

第二章・第三章・第四章では、私が作品を制作しながら形成してきた世界の見かたについて述べる。第二章では、人間にとっての世界が私の定義する「場所」と「空間」から成っているという考えについて述べる。本論で用いている「場所」と「空間」の用語は、筆者による特別な意味合いを込めたものである。「場所」はこの世に「出現」してやがて消滅していくものたちが存在し、その生の時間を展開させていく現実の時空を意味する。「空間」は人間が観念や想像の力でたどり着く、生身の生の限界を超えた次元を意味する。第三章では互いに分離された何かと何かを結びつけることで新しい次元を開こうとしてきた自身の制作の軌跡を振り返る。それは、地球から生まれた存在同士の分離が起こる以前の、より根源的な状態へと遡ろうとすることを意味している。第四章では、生命の存在の謎に向き合うことから出発し、個々の生命存在の「意識」や「心」についての考察に至った経緯を述べる。各章のテーマにおける探究は、それぞれ、博士審査展提出作品の《葉と光》・《精霊》・《邂逅（場所と空間）》につながっているため、各章の最後で、それぞれの作品に言及する。

結びの部分では、私の制作が、私の定義する「場所」への志向性と「空間」への志向性を行き来することによって発展していくことを確認する。この両者は両極に位置するものでありながら、互いを排除するものではなく、同時に意識されることによって互いの輝きを強め合うものである。これらの概念を通して世界を見ることで、生きることはより鮮烈な体験として照らし出されることとなるだろう。

（論文審査結果の要旨）

本論文の執筆者・荒殿優花は、神話や精神世界といったものを、いかに彫刻の世界に取り込み、それを造形するかということテーマとして制作をしてきた。本論文は、その制作の過程で深めた思索を、言葉によって論文としてまとめたものである。

本論文のキーワードは「場所」と「空間」である。この言葉は、ともに日常で用いられるものだが、荒殿は、そこに独自の意味付けと世界観を持ち込み、この二つのキーワードによって際立つ世界を、論文として語り、それを自身の作品へと帰着させていく。

本論の構成は、四章からなる。まず第一章では、美術作品を成立させる、物質と精神の両面について考察する。美術作品というのはモノであり、物質であるが、同時にそれは精神の現れでもある。とくに彫刻は、絵画などに比べてより「物質」としての側面が強いが、筆者は、まずこのモノとしての彫刻の話から始め、それをやがて「精神」へと結びつけようと試みる。筆者は、物質である美術作品が精神とも化したとき、そこに「生成」とも呼ぶべきものが出現するが、それが本論文のタイトルでもある「出現の光景」の意味するところである。

第二章では、本論文のキーワードである「場所」と「空間」についての論考が展開される。筆者が考える「場所」には、この現実世界に在るという場所性とも関わるものであるが、「空間」が意味するところは、そういう現実を超越した、永遠というような世界とも関わるような空間のことである。筆者は、それを自身の作品で用いた、無限に繰り返され増殖し、遠近法の彼方へと消えていくようなものとして造形する。

第三章では、物質と精神、「場所」と「空間」など、異なり対立するものを再統合すべく、思索と実作を試みる。ここでは「精霊」というキーワード、博士展にも出品した糸による作品「精霊」に、その一つの集約をみることができる。

そして第四章で、まとめに向かう思考の中で、「生命」や「心」という用語を用いて語り、最後の「結び」では、本論文のキーワードである「場所」と「空間」を、互いの輝きを強め合うものとしてとらえ、論文を終える。

本論文のコンセプト、また博士展の作品群で参照すべき美術として、南フランスのロザリオ礼拝堂にあるアンリ・マチスのステンドグラス、壁画、祭壇の空間が重要なものであると評者は考えるが、筆者もまた、この礼拝堂を訪れ影響を受けたことを本論文で述べている。筆者の荒殿が試みているのは、そんなマチスが作り出した世界を、21世紀の今日において、どのように具体化するか、ということにあるとも思われる。

筆者は、本論文において、「時間」「空間」「生成」「出現」「精霊」などの概念を用いて、自身の彫刻作品の背後にある思索を論考し、それを一つの論文としてまとめ上げた。本論文は東京藝術大学・博士論文として

の十分な水準をもっており、よって本論文を合格とする。

(作品審査結果の要旨)

宇宙を構成する物質の変容と循環、人間を含む生命の出現と消滅を統合することで生まれる荒殿優花のイメージは、「世界とはなにか」という根源的な問いへ投げかけられている。論文において荒殿は、世界を大きく2つに分けてとらえており、1つは「場所」(この世に「出現」してやがて消滅していくものたちが存在し、その生の時間を展開させていく現実の時空)であり、もう1つは「空間」(人間が観念や想像の力でたどり着く、生身の生の限界を超えた次元)である。作品では、この2つに分離した世界を独自の神話的イメージにより結び付け、その関係性を探る試みが実践されている。

作品《葉と光》は、「場所」と「空間」をテーマにつくられた3点組の作品である。荒殿は自身が拾い上げた1枚の葉の形態を「場所」の象徴とし、タイルを「空間」の象徴として作品の主な構成要素としている。作品の中心には、部屋の一角を切り取ったような造形物が配置されている。この造形物は、美術史家エルヴィン・パノフスキーや、アンリ・マティスによるロザリオ礼拝堂の空間観が踏まえられており、2次元と3次元が同居したような空間が、白いタイルを用い示されている。タイルの部屋の壁面には、葉の形をしたステンドグラスと、この部屋のシルエットに縁取られた窓枠(窓枠には鏡がはめ込まれており、縮尺された部屋の空間が透視図法により描かれている)が配置されている。また、この部屋の背後の壁には葉をモチーフにつくられた毛糸の作品と、鏡の表面に葉のフロッタージュが施された作品(部屋のシルエットに切り取られた額縁を用いている)が配置されている。これら3点の造形物の呼応により、濁りのない、重層的な入れ子状の空間が生まれており、「場所」と「空間」の関係性がストレートに可視化されている。

作品《精霊》は、荒殿が人間と動物をモチーフに取り組んできた「ワープ」シリーズの集大成として位置付けることができる。これまでのシリーズは粘土を基本素材に用い、モチーフ(人間と動物)を立体的に構成したものが多かったのだが、《精霊》ではモチーフ同士が平面的に融合された表現となっている。素材には毛糸が用いられており、毛糸の一本一本が作品の構成要素の全てを等価なものとして分解する役割を果たしている。荒殿が「形象」という語を用い目指してきた作品世界(形と意味が分ちがたく結びついたもの、且つ、自らの世界観を反映したもの)が、これまでにないスケールで具現化されている。

作品《邂逅(場所と空間)》は、幼少期の荒殿自身がモチーフとなっている。ビデオテープに残された幼少期の自分に会った少女期の記憶。その記憶さえも曖昧になり彼方の出来事となっている現在の自分。荒殿はこの作品で、記憶の奥底に存在する幼少期の自分と向き合い、生々しく自刻像として再現している。両腕を少し開き遊戯する自刻像は、単に遡及的な世界を示すものではなく、「場所」と「空間」の間を行き来する存在、繋ぎ止める存在として機能させている。

以上提出された3点の作品は、審査グループにより博士取得に相応しい内容であると判断された。

(総合審査結果の要旨)

現代の多様化した美術とその領域の拡大とともに、さまざまに表現される意味をより広く解釈する事は、新しい可能性として興味のあるところである。

「彫刻」としての研究領域である荒殿優花の作品と論文について、彫刻を軸とした在り方としての本質的な考えは、自己の経験と記憶を土台とした空間構成が論文と作品表現の骨組みとなったと思われ、荒殿のユニークなまとまりのある発表内容になっている。

これら一連の表現の動機となるのは、物質から新たに「出現」することと「存在する」ことへの確認にある。きっかけとなったのは、論中のなかにもある、展覧会場で観たジョルジョ・デ・キリコの絵画「遠い友からの挨拶」のビスケットにその考え方の源があるように、「言語を絶する存在。なぜ、ここに、このようなものが存在するのだろうと、途方に暮れるような感覚を与えてくれるもの。それは、美術作品のなかに現れる最も面白いもののひとつ」が「それをデ・キリコが描いたことによって生じた第二の神秘」といったところに一連の作者の制作意図としている切欠の一つとして展開し「物質の変容とモノの『出現』」の意味を読み

とる事ができる。また、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」などから「場所」と「空間」といった定義についての解釈は作者にとって重要な要素であり時空の形成に基づいているようである。「形象」との関係性については、ホルスト・アンテスやジョルジョ・デ・キリコを挙げており、展示空間の中にさらなるレイヤーとしての二重の空間が存在することが空間次元を展開する彫刻としての表現の要素が確立されている。

発表者の作品及び論文においては、「時間」と「空間」「生成」「出現」「精霊」などについて独自の疑念を用いて、自身の彫刻作品の背後にある思索を論考し、それを一つの展示作品とともに発表論文としてまとめ上げた。今後の課題を挙げるとするならばインスタレーションとしての各作品の造形と空間について、より関係性を明確にすることで、鑑賞者により魅力的な伝え方ができたのではないかと思われた。

東京藝術大学博士としての十分な水準をもっており、これら判定の結果、本博士総合評価としての作品・論文を合格とする。